第五　内閣告諭及外務大臣談話發表

之レト同時ニ近衛總理大臣ハ左ノ内閣告諭ヲ發シタリ

内閣告諭

日獨伊三國條約ノ締結ニ當リ、畏クモ　大詔ヲ煥發セラレ、帝國ノ擴フ所ヲ明ニシ、國民ノ進ムヘキ道ヲ示サセ給ヘリ。聖慮宏遠洵ニ恐懼感激ニ堪ヘサルナリ。

恭シク惟フニ世界ノ平和ヲ保持シ、大東亞ノ安定ヲ確立スルハ、我カ肇國ノ精神ニ淵源シ、正ニ不動ノ國是タリ。昨秋歐洲戰爭ノ發生ヲ見、世界ノ騷亂益々擴大シ、底止スルトコロヲ知ラス。是ニ於テカ速ニ禍亂ヲ截定シ、平和克服ノ方途ヲ講スルハ、現下喫緊ノ要務タリ。適々獨伊兩國ハ帝國ト志向ヲ同シウスルモノアリ。因リテ帝

國ハ之ト相提携シ、夫々大東亞及ヒ歐洲ノ地域ニ於テ新秩序ヲ建設シ、進ンテ世界平和ノ克復ニ協力センコトヲ期シ、今般三國間ニ條約ノ締結ヲ見ルニ至レリ。

今ヤ帝國ハイヨイヨ決意ヲ新ニシテ、大東亞ノ新秩序建設ニ邁進スルノ秋ナリ。然レトモ帝國ノ所信ヲ貫徹スルハ前途ナホ遼遠ニシテ、幾多ノ障碍ニ遭遇スルコトアルヘキヲ覺悟セサルヘカラス。全國民ハ謹テ　聖旨ヲ奉體シ、非常時局ノ克復ノタメ益々國體ノ觀念ヲ明徴ニシ、協心戮力、如何ナル難關ヲモ突破シ、以テ　聖慮ヲ安ンシ奉ランコトヲ期セサルヘカラス。是レ本大臣ノ全國民ニ望ム所ナリ。

昭和十五年九月二十七日

内閣總理大臣　公爵　近衛文麿

次テ同日午後十時松岡外務大臣ハ左記ノ談話ヲ東京中央放送局ヨリ全國ニ放送シ、條約成立ノ由來ト其意義ニ付キ説明スル所アリ。

外務省發表（第二）

昭和一五、九、二七午後十時放送

外務大臣談話

日、獨、伊三國條約ノ締結ニ當リ畏クモ本日優渥ナル詔書ヲ渙發セラレマシタコトハ誠ニ恐レ多イ限リテアリマス、又我等臣民ノ嚮ヘベキ所ハ内閣總理大臣告諭ヲ以テハッキリト示サレタノテアリマスカ

大御心ヲ體シ、時局ヲ突破スル爲メ出來ル丈ケ努力致サネハナリマセヌ。我國ハ今ヤ空前トモ云フヘキ程ノ困難ナ局面ニ立ッテ居リマシテ此際ノ我國ノ出方ハ實ニ皇國ノ興廢ニ係ハル極メテ重大ナ問題テアリマス、政府ハソノ責任ノ重ク且ツ大キイコトヲ切ニ感シテ居

リマシテ萬間違ヒノナイヤウニト心掛ケテ居ルノテアリマス。

我國ノ對外政策ハ支那事變ノ處理ニ邁進シ、大東亞共榮圏ノ建設ニ精進シツツ、轟テ世界全體ノ眞ノ平和ヲ作ラウトスルモノテアリマス。我國ノ此本當ノ心持ハマタマタ世界ニハヨクハ認メラレテ居リマセヌ。或ハ昔ノ儘ノ國ト國トノ間ノ秩序ヲ其儘持チ續ケテ行クコトヲ平和テアルト誤認シ、或ハ之レヲ變更スルコトハ已ムヲ得ナイト考ヘテ居リマシテモ、尙多分ニ現狀ニ戀々トシテ居ル國カアルヤウナ實狀テアリマス。從ツテ、列國ノ中ニハ、日本カ大東亞ニ於テ新ラシイ秩序ヲ作ルコトヲ直接間接ニ妨碍シヤウト企テ、甚タシキニ至ツテハアラユル方法テ、眞ノ世界平和ヲ確立スルコトヲ以テ我國開闢以來ノ大使命トスル、皇國ノ進路ヲ妨ケントスル國ノ有リマ

スコトハ誠ニ遺憾ニ堪ヘナイ次第テアリマス、我國ノ政府ハ從來カヤウナル事態ヲ改善シヤウトシテ、出來得ル限リ努力シテ來タノテアリマスカ、依然事態ハ中々改善セラレサウニモ見エナイノミナラス、寧ロ一面ニハ、悪化サヘシツツアルト想ハレル節カアルノテアリマス。今ヤ皇國ハ唯世界形勢ノ推移ノママニ何時マテモ、フラフラシテルコトノ出來ナイ嚴頭ニ遂ニ立タサレルトコロマテ事態ハ押詰ツテ來タノテアリマス。

此秋ニ當ツテ我國ノ執ルヘキ途ハ唯一ツシカ有リマセン、即チ內、速カニ國防國家完成ノ新體制ヲ確立シ、一億一心、堅イ決意ヲナシ外、我國ト略ホ同シ方針ト心掛トヲ持ツテ居ル獨逸、伊太利ノ二國ト結ヒ、更ニ進ンテ世界到ル處テ、我國ト一緒ニヤツテ行ケル他ノ

諸國トモ提携シ、斷乎所信ニ邁進スルト同時ニ、コレヲ妨ケヤウトスル國ヲシテ目ヲ覺マサセ、世界新秩序建設ト云フ、大和民族終局ノ目的達成ヲ期スルコトデアリマス。

ソコデ先般來、獨、伊兩國ト折衝致シマシタ結果、先程發表致シマシタ日、獨、伊同盟ニ關スル條約ノ成立ヲ見ルニ至ツタ次第デアリマス。

斯樣ニシテ此ノ歷史的ナ三國ノ同盟關係カ出來上リマシタコトハ叡聖文武ニ渡ラセ給フ

天皇陛下

ノ御英斷ニ依ルコトデアリマシテ、誠ニ畏レ多イ次第デアリマス、又對手國デアル獨逸、伊太利ノ卓越シタ指導者「ヒトラー」總統ト

「ムソリニ」氏ノ明斷ニモ負フ所カ多イノデアリマス。殊ニ獨逸ノ「フォン・リッベントロップ」外務大臣ハ就任當時カラ日、獨兩國提携ノ爲メ熱心ニ盡力セラレ、又伊太利ノ外務大臣「チアノ」伯ハ曾テ東亞ニ在勤サレタ經驗モアリ、我國ノ東亞ニ於ケル地位ニ付イテハ、夙ニ正シイ認識ヲ持ツテ居ラレ、日、獨、伊親善ノ爲メニ、不斷努力サレタノデアリマス、此條約ノ成立ニ付イテ此二人ノ外務大臣ノ努力カ與ツテ力ノ有リマシタコトハ、今更申ス迄モアリマセン。

此條約ハ我國ト獨、伊兩國トカ、夫々大東亞ト歐羅巴トデ現ニ努力シテ居リマストコロノ、新秩序ヲ作ル爲メニ、力ヲ合ハセ、三國ノ何レカカ、歐洲戰爭又ハ支那事變ニ仲間入リヲシテ居ナイ國カラ攻

擊ヲ受ケマシタ場合、コノ三國ハ政治上、軍事上及經濟上ノ有ラユル手段デ御互ニ助ケ合フコトニ成ツテ居リマス、從ツテ此條約カ出來タカラト言ツテ、我國ハ現在ノ歐洲戰爭ニ參加スルノデハアリマセン。又何レノ國ニ對シテモ我方ヨリ戰爭ヲ挑マウトスルモノデモアリマセン。又此條約ハ日、獨、伊三國ト「ソヴイエト」聯邦トノ間ノ事ニハ少シモ影響ヲ及ホスモノデハアリマセヌ。

尙本條約ニ於テハ、大東亞ノ新秩序ヲ造リ出スコトニ付キマシテ、獨逸ト伊太利ハ、日本ノ指導的地位、即チ平タク言ヘハ、先達トテモ申シマセウカ、之ヲ認メ、又歐洲ニ於テ獨、伊兩國カ、現ニ國ヲ賭シテマテ、鬪ツテ居リマストコロノ新秩序建設ニ付、日本ハ獨、伊兩國ノ指導的地位ヲ認メ、ソシテ日、獨、伊三國カ、オ互ニ力ヲ

合ハセ、飽クマデ助ケ合ツテ行カウト云フコトヲ定メタノデアリマス。

此條約ノ出來マシタコトニヨツテ一面獨伊二大國ヲ我カ強イ與國ニ持ツコトカ出來タノデアリマスカ、他面大東亞ノ指導者、即チ先達トシテノ、我國ノ責任ハイヨイヨ重キヲ加ヘタノデアリマス。政府ハ飽迄平和ナ手段デ以テ此責任ヲ果ス積リデアリマスカ、時ト場合ニ依ツテハ眞ニ重大ナ覺悟ヲ必要トスルコトカ無イトハ限リマセヌ。前途ニハ幾多ノ障碍ト困難トカ横ハツテ居リマシテ、並大抵ノコトデハ之ヲ乘切ルコトハ難カシイト云フコトヲ篤ト承知シ、充分ニ內外ノ情勢ヲ考ヘ、官民一體トナツテ一切ノ苦難ト犧牲トヲ忍ヒ、愈々奮勵努力シテ

大御心ニ副ヒ奉ルコトヲ期スヘキテアリマス。

吾々國民ニ有リ難イ御詔書ヲ下シ置カレマシタ、コノ機會ヲ持チマシテ、茲ニ謹ンテ、此條約ノ成立シタト云フ事ト併セテソノ意義ニ付聊カ私ノ考ヲ申述ヘテ、此際ノ御挨拶ニ代ユル次第テアリマス。

第六　東京ニ於ケル日、獨、伊三國官憲ノ交歡

條約調印ノ時刻、外務大臣ハ官舍ニ獨、伊兩國大使及大使館員竝ニ日本側關係官廳首腦部ヲ茶會ニ招待シテ、內輪ノ祝意ヲ交換シタルカ、其際「ベルリン」ヨリノ直通電話ヲ以テ「リッベントロップ」及「チアノ」ノ獨伊外相ヨリ夫々松岡外相ニ呼カケテ、祝意ヲ表シ外相亦之レニ答ヘテ祝詞ヲ述ヘタルカ、之レト前後シテ近衛總理大臣ヨリ「ヒトラー」及「ムッソリニ」兩氏ニ宛テ、又松岡外務大臣ヨリハ「リッベントロップ」「チアノ」兩外相ニ宛テ夫々左記ノ祝電ヲ發シタリ。